



## 第三回日中友好スキー交流事業レポート

札幌厚別 工藤 宣昭

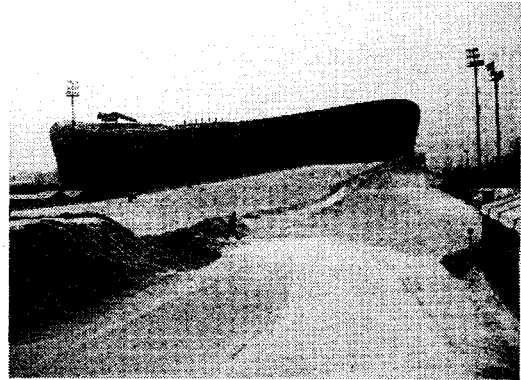
2010年シーズンもオフを迎えた5月中旬の札幌教育専門委員会の席上で、北海道スキー指導者協会広報部から「日中友好スキー交流事業」の原稿を依頼されました。私はこの事業の責任者でも担当理事でもなく、ただ一介の総務主任兼講師だったのですが、皆様にこの事業について少しでもご理解をいただければ、と思い寄稿することにしました。

以下の内容につきましては、私個人の見解で訪中の感想を述べさせていただきましたので、ご了承いただければと思います。

さて、最近の中国事情はマスコミの報道や観光地での中国人の多さでお分かりいただけると思います。現在、上海万博を開催中ですが、日本の大阪万博の頃と同じで、団体旅行で大挙して海外に出かけ、パリでブランド品を買いあさり、どこかの製紙会社の会長が名画を数十億円で買ったり、SONYがニューヨークの一等地を買ったりして、ヒンシュクをかった時代と、今の中国が似ていると思います。

その中国の富裕層と云われる人達にとって、スキーをすることがひとつのステイタスとなっています。北京の近郊には、16ヶ所ものスキー場（勿論、人口雪ですが空気が乾燥しているので、バーンは素晴らしいです）があり、驚いたのは、今年あのオリンピックで有名な「鳥の巣」スタジアムに雪を付けてスキーを楽しんでいました。日本の「私をスキーに連れてって」の映画が評判になった頃の時代と想像いただければよいと思います。

1月13日、我々訪中団14名は、団長吉田英一（教育本部長）、副団長三品章男（統括調整幹事長）、北京石京龍スキー場担当阿部洋一（理



オリンピック会場の「鳥の巣」もスキー場に

事）、天津蘇州スキー場担当荒谷信彦（理事）、主任講師今川和雄（SAJ専門委員）、総務主任兼講師工藤宣昭（ブロック技術員）、通訳兼講師菅原美智子（元デモ）、講師横嶋敦範（ブロック技術員）、講師中村昇太（ブロック技術員）、講師金田智子（SAJデモ）、講師高橋瑞季（SAHデモ）、講師福士康弘（SAHデモ）、講師阿部公憲（SAHデモ）、講師藤井宏二（SAHデモ）の各氏全員が千歳空港に集合して、吉田本部長の挨拶で結団式を行い、4時間弱のフライトで北京に到着しました。北京空港では、これからお世話になる石京龍スキー場と天津蘇州スキー場（両スキー場でインストラクターの指導をする）の関係者、通訳の方々が出迎えてくれました。

その後、2時間をかけて石京龍スキー場に全員が到着、歓迎の夕食会となりました。

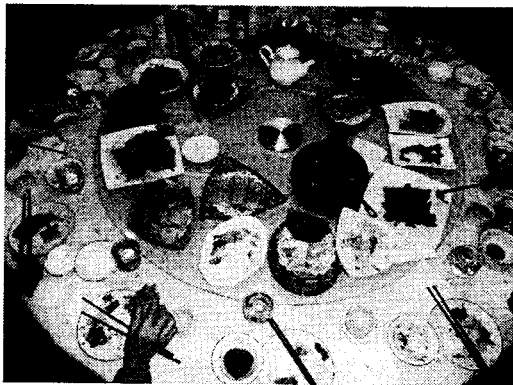
私が今まで、日本で食べ慣れている中華料理とは違う「本物の中国料理」で、品数はたくさんあるし、量も多く、おっかなびっくり箸を付けてみたら、意外と美味しい。お酒はバイチュウ（白酒）という度数の高いもので、「乾杯」



大歓迎の夕食会



開会式の記念撮影



本物の中国料理です



トラの着ぐるみで大人気の吉田本部長

と言う度にグラスの底を見せなければならないので、中国式歓迎のお酒の勧め方には、ホトホト参りました。しかし、中国側の歓迎の気持ちが十分に伝わってきた大歓迎会でした。

1月14日、石京龍スキー場で開会式が行われました。オープニングセレモニーとして、我々のデモンストレーションからスタート。

まず始めに、吉田本部長が今年の干支であるトラの着ぐるみを着て颯爽と滑ると大歓声上がり、その後三品副団長、安部、荒谷理事、今川専門委員、菅原通訳兼講師、私のトレーン、続いて金田SAJデモ、高橋SAHデモ、福士SAHデモ、阿部SAHデモ、藤井SAHデモ、横嶋、中村ブロック技術員、7名による見ごたえのあるフォーメーションを披露しました。

最後は、今回強力な助っ人として参加していただいたキロロスキー場の校長栗野元全日本デモと鈴木教師による華麗な滑りを見て、中国のギャラリーも大歓声を上げていました。

開会式には、中国の報道機関も多数集まり関心の高さが伺えました。その後、我々天津蘇州



金田、阿部、横嶋、福士各講師のデモンストレーション

スキー場組み6名は3時間以上かけて移動、現地に到着したのが午後4時過ぎで、時間もないことから受講生と顔合わせを行い、講師の自己紹介と簡単な日程の確認を行いました。

1月15日、8時半にスキー場に到着後、レストランで朝食をとっているところへ、北京から三品副団長が到着。9時半にはゲレンデに出て班分けを行い、A班は金田・横嶋講師で14名、B班は福士・阿部講師で20名、工藤班は4名、荒谷班は2名でスタートしました。

12時で午前の実技講習を終え昼食。13時から

15時までは実技講習を行い、16時からスキー場の会議室で理論講習を行いました。



天津蘇州スキー場全景

パソコンも順調に動き、安部講師の手助けと王さんの素晴らしい通訳に助けられ、何とか日本の技術体系を説明できました。

その後、金田SAJデモに技術選手権大会のスキー技術のお話をしてもらい17時半に終了。



工藤班の講習風景



真剣な理論講習風景（右側筆者）

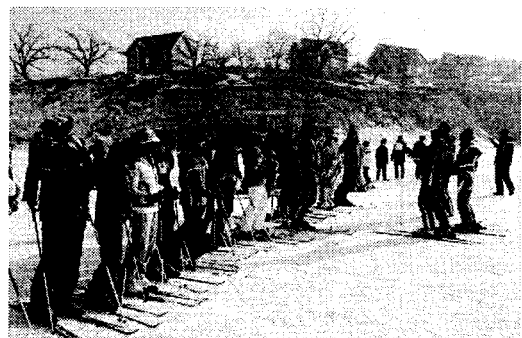
中国人受講生の真剣な眼差しと、学ぼうとする姿勢に感心しました。中国の指導員は、日本のスキー指導法や最新スキー技術論に非常に関心が高く、DVDも食い入るように見入ってい

ました。中国側の要望は、子供達への指導法や団体指導法と、インストラクターとしての各個人のスキルアップの二つでした。私と荒谷理事の班は、日本で言う2級にならない程度のレベルですが、初心者指導として必要なビンディングの安全性、スキーの着脱、方向転換から始め、その後プルークファーレン、斜滑降、横滑り等の基本的な技術指導を行いました。

中国では団体指導といっても、整列して並ぶという習慣がなく、こちら側も戸惑うばかりでしたが、中国人インストラクターの習いたいという一生懸命な気持ちは伝わってきました。

1月16日、この日は土曜日で北京市内の視察に出かけました。オリンピックで有名になったメインスタジアム「鳥の巣」と天安門広場・故宮を見学しました。当初は「鳥の巣」の特設スキーゲレンデで、北京市のスキー愛好家を対象に無料講習会を開催する予定でしたが、ゲレンデは小学校の校庭に作るスキー山程度なので、講習会は無理であるという判断で中止となりました。天安門広場の広大な広さと故宮の荘厳・壮大な造りに圧倒された一日でした。

1月17日、日曜日なので北京では出来なかった一般市民を対象としたスキー講習会を行いました。しかし、始めからスキーを習いたい人達が集まっているわけではなく、我々がスキー場に来ている人達を講習に誘い込まなければならないので、どの程度の人数が集まるか不安でしたが、中国人通訳王さんの機敏な対応で60名ほどがすぐに集まりました。



一般市民を対象としたスキー講習会

上級班を栗野・鈴木講師とし10名、中級班は金田・横嶋講師として20名、初級班は福士・阿部講師として30名程度の人数で行いました。

荒谷理事と私は初級班のお手伝いです。各班の講師のデモンストレーション後、講習となりましたが、一日中報道陣の取材があり、デモンストレーションやインタビューに精力的に対応してくれた講師陣に感謝です。

まずは、大成功であったと思います。

ここで蛇足になりますが、私がこの日の講習会で感じたことは、何せ男性が優しく、女性は偉そうとか威張っているのです。男性はグレンデまで女性のスキーを運ぶのは当然、ブーツを履くのを手伝い、それから自分のスキーを持ってくるので大変です。食事の時も、女性はテーブルに座っているだけで、すべて男性が食べ物を運び、お金を支払う様子は、女性が男性を顎で使っている有様です。通訳の方に聞いたところ、20代から30代の結婚適齢期の男女の比率が、一人っ子政策で極端にいびつになり、男性が2500万人も多く、女性が不足している結果ということでした。そして中国人の男性は、日本の女性のような、優しく思いやりのある人と結婚したいと日本女性が大人気になっているそうです。それにしても2500万人不足とは、恐れ入りました。日本の人口の五分之一であり、このこと一つをとっても中国には圧倒される思いです。

1月18日、この日から中国各地のスキー場の学校長6名が我々の評判を聞きつけて参加してきたので、講師は栗野・鈴木両氏にお願いし、他は15日に班分けした通りで行い、講習内容についても日本の新スキー教程の自然で楽なスキー技術の伝達を行いました。午後4時からの理論研修では、検定制度の解説と翌日行う技能テストについて、急斜面での小回り和大回りの説明をしました。その後、栗野元全日本デモに「スキー道具による技術の進歩」というお話をさせていただき、質問にも親切に受け答えしていただきました。キロロのスタッフには本当に助けていただき、感謝しております。

また、蛇足となりますが中国スキー連盟には、

教育部という一般市民を対象としたスキー普及活動をする機関が無く、指導書とかスキー教程も発刊されておりません。勿論、一般スキーヤーに対する検定制度や級別テストもないのが現状です。

1月19日、いよいよ技能テストの日を迎えましたが、中国のインストラクターもあまり経験がないので、チョット緊張気味でした。

午前中は技能テストの種目練習を行い、午後から三品副団長、荒谷理事、工藤の三名でジャッジを行いました。受験者は32名、スタートからの3名で評価の基準を決め、その後は順次スタートさせましたが、点数にばらつきが無く、さすがと感じました。



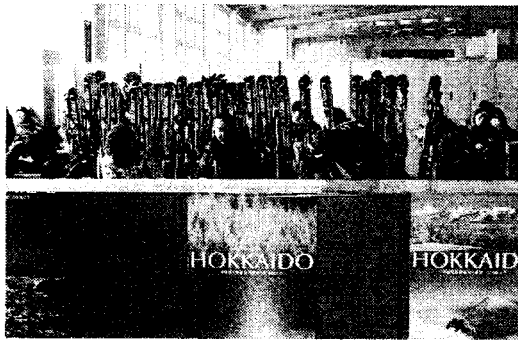
技能テスト “これが中国のインストラクター”



技能テスト “こわいオジさん達”

閉会式は、受講生のデモンストレーションを各班ごとに行い、技能テストの成績発表後、お別れ会が延々と続き、別れを惜しんでくれました。それもこれも各講師が熱心にこの事業に取り組み、その気持ちが受講生である中国のインストラクターに伝わったからだと思います。

中国のインストラクターは、スキーが高くて買えないためスキー場からの借り物であり、収



スキー場のレンタルスキー



講習会修了証を手にする中国のインストラクター

入も月に千元（一万四千元）程度で、地方の貧しい農村の若者にとっては、貴重な現金収入だそうです。スキー学校長になると急激に給料が上がり、10倍にもなるそうです。ちなみに北京のサラリーマンの給料は、四千元（六万円）程が平均だそうです。スキー場では、日本のインストラクターに1シーズン来て欲しいという話もあるようですが、報酬がネックになっているようです。

1月20日、一週間の日中友好スキー交流事業も終わり、無事札幌へ帰ることが出来ました。

千歳空港では、吉田本部長の挨拶で解団式を行い今回の交流事業を終了しましたが、この事業に参加することが出来てとても勉強になりました。中国のスキー業界は、まだまだこれから発展するであろうし、それに関わる人達は本当に良い人達ばかりで、情熱を持って取り組んでいました。日本では忘れかけている一番大切な「スキーに対する情熱」を感じて、日本のスキー界も今一度この情熱を持たなければいけないと思いました。

終わりに、中国と日本の関係が今のような観

光客の増加とか、貿易だけでよいのだろうか？

私は本当の意味で、一民間団体である北海道スキー連盟が、日本と中国の懸け橋となり、スキーを通じて友好に導く最高の交流ではないかと考えます。



歓迎会の料理の様子

過去、日本がそうであったように、オーストリアのクルッケンハウザー教授やホピヒラー教授にスキー技術の教示を受けたり、北海道においては、朝里川温泉スキー場（ホワイトバレースキー場）に数年間にわたり、オーストリアのデモが来日していた時期もありました。

私もオーストリアのデモに習いに行った一人ですが、今はスキー後進国である中国に温かい支援の手を差し伸べるのが、真の友好ではないかと考えます。最後にこの事業を支えてくれた札幌市経済交流室長や、多くの通訳の方々、中国のスキー場関係者の方々に心から敬意と感謝の気持ちと、そしてお礼を申し上げ終わりとします。



初級班の講習風景

(札幌厚別スキー指導員会 会長)